

発行：ASPB ラオスの子どもに絵本を送る会 〒143-0025 東京都大田区南馬込6-29-12 ミキハイツ303 tel/fax03-3755-1603

ラオスのこども通信

27号
2003年2月発行

ASPB 20周年特集 第2弾



子ども文化センター
人形劇のクラス
(ルアンパバン)

学校でやらないことを始めよう！ 楽しい場所を作ろう！

子ども文化センター(CCC)の歩み 1994年～

学校に通えない。入学してもやめてしまう。ラオスではそんな状況が続いています。学校が遠い、家の手伝いがある、親の理解がないなど、理由はいくつもあります。教育への協力といえば、多くは校舎を建てる、教科書を配るが一般的でした。が、「でも、今の学校は、子どもが行きたくなくなるところって見える？」
「子どもが伸び伸び活動できる場が、どこにもないでしょう」
「だったら、作りましょう！」
と、会のチャンタソンとラオス情報文化省の局長であったダラー・カンヤラーさんが話し合ったのが1993年。翌94年、子ども文化センター(CCC)が誕生しました。それから10年の歩み。活発に活動が行われ、様々な地域に普及しています。また同時に、いくつかの課題に直面しています。

ラオスのデータ！

小学1年生が5年生
まで在学する率

57%

(1995～1999年)

出典：ユニセフ

35%

(1993～1998年)

出典：教育省統計

学びと表現は両輪。だから子ども文化センター。

■情操教育？校舎も教科書もないラオスで？

「子ども文化センター(CCC)はラオスで初めての情操教育施設です」

私たちは、自分たちがこれを始めたのだと鼻を高くして紹介したいのだが、

「ラオスで情操教育？もっと優先すべきことがあるのでは？」

と、冷たい視線を感じることもある。金持ちの子弟の習い事と思われるのかもしれない。

しかし、学校教育の普及していないラオスでこそ、「ハナ垂れ小僧/娘たちのための居場所」として必要なのだ。子どもの存在感と教育の必要を、親と行政にアピールしていくためにも。

■当初、大人には理解されず

ラオスの学校教育で行われているのは読み書き算盤ばかり。子どもたちを学校から遠ざける理由の一つが、つまらない暗記だけの授業であった。

もっと自由に、本を読んだり、読み聞かせや紙芝居もある図書室を中心に、子どもたちに楽しさを提供したい、覚えるだけでなく、自分の気持ちや考えを表す場を作りたい。理科や工作も紙の上で習うの

子ども文化センターの1週間

来館する子ども……………3,442人
「読み聞かせ」を聞く子……………311人
「伝統舞踊・音楽」をする子……………282人
「図画・工作」をする子……………238人
本を借りて帰る子(1日当たり)……………209人
(いずれも4館の合計)

でなく、実際に体験できる場があったらいいのに！ ピアノだってバイオリンだって伝統楽器のケーンやラナートも、子どもにさわらせたい！ 劇もやらせたい！ 詩も作らせたい！ その結果生まれたのが、子ども文化センターだった。

94年4月、私立中学だった建物の2階を図書室、工作室、お絵かき室などにしてヴィエンチャン子ども文化センターは開設。SVA(シャンティ国際ボランティア会)による伝統音楽・舞踊のクラスも併設された。オーストラリア政府の支援で西洋音楽を学べる予定だったが、施設環境が十分でないからとキャンセルされた。

たくさん子どもたちが訪れた。子どもにとって、ここで歌を歌い、絵を描き、踊ることは紛れもなく楽しいことなのである。ところが親たちはセンター活動を理解できず、「遊んでないで早く帰りなさい」と呼び戻しに来たこともあった。

■志を同じくするラオスの人々と

きっかけは女性2人の教育談義だったが、他の地域でもその素地が息づいていた。北西部のサイヤブリでは放課後子どもたちを集め、読み聞かせや伝統音楽・舞踊を教えている小学校の先生の活動があった。中部ボリカムサイでは、ナイトクラブを廃業したという体育館風の建物で、子どもたちに絵や工作を教えている教育委員会のスタッフがいた。そこで3拠点による活動として、ASPBは支援を始めた。97年には旧王都で世界遺産のルアンパバンに開設。4か所支援となった。運営責任は各県教育委員会と県情報文化局が持った。

当初、関心を寄せなかった行政機関も、子どもたちが生き生きと活動する姿に、次第に注目するようになった。各県から会に開設の希望が寄せら

れ、政府も活動を認知。情報文化省は子どもの学校外での教育を担う部署として中央子ども文化センター局を設置し、活動の推進を図るにいたったのは、大きな成果といえよう。

■理念のズレ、自立の困難などに課題

この10年、ASPBは、学びと表現は教育の欠くことの出来ない両輪と位置づけ、子ども文化センターを支援してきた。しかし、課題も生じている。

私たちにとっての子ども文化センターは、ごく普通の子どもたちが集い、子どもであることを楽しむ場であるが、政府の発想は「ラオスの子ども」代表として、アセアンの子どもフェスティバルなどで活躍する人材を育成する場となってしまう。

最大の課題は自立への道筋である。運営資金として、職員と講師の給与、教材、図書購入などの費用を支援していることから、いったん開始すると、こちらの都合で中止はしにくい。利用する子どもたちは増え続けているにもかかわらず、ラオス政府、地方行政は資金の捻出がなかなか出来ずにいる。多少変化の兆しはあるものの、必要な額には遠い。ASPBの財政悪化の中で、頭の痛い問題だ。センター自らの資金調達を求めると、「では、ビヤホールで子どもたちを踊らせて資金を作ろう」という話が出る。それはセンターの理念に関わる問題だ。

現在、西部のゲンタオ、シーサタナークなど新たなセンターが次々と立ち上がり、会の支援対象は6か所に増えた。その他、会から財政支援を受けていない新規のセンターが10か所ある。会では、支援総額は据え置きとし、新規センターへの支援はセンター相互の協議によって、その枠内で配分してもらうようにしている。これも自立への方策の一つと考えている。

個々のセンターによる資金調達の取り組みもある。干しバナナなどを販売したり、広報誌を発行し、各方面に資金協力を求めるなど、だ。実を結ぶにはまだ、時間がかかるだろうが、自主調達への支援は会の課題である。

火	水	木	金	土	日	月
編み物	読み 聞かせ		読み 聞かせ	読み 聞かせ	図画	お休 みの 日
歌	図画	伝統 舞踊	機織り	図画	歌	
English 機織り	ことば・ ゲーム	歌	伝統 舞踊	ことば・ ゲーム	English 木彫り	
劇	伝統 楽器		伝統 楽器	伝統 舞踊	ことば ゲーム	
	編み物	劇		編み物		
		English 木彫り		機織り		
				伝統 人形劇		
				木彫り		

ルアンパバン子ども文化センターの1週間
火～金曜日は放課後 4～5時 土曜日は8～4時まで

■子どもに目を向けた新たな方向を

今、ラオス社会は経済の開放とともに、生活の向上を求めて農村からの移動が始まり、犯罪、非行など都市型の子どもの問題が浮上している。子ども文化センターも、子どもの犯罪・非行からのバリアーとなることが求められつつある。

また、センターの活動、運営について、子どもが意見を述べ、それを運営に反映させ、子どもの参加を保証するという大人側の態度も求められている。

これまでも、センターは子どもが伸び伸びとできる場であったし、年長の子がプレー・リーダーとなって活動が行われてきた。しかし、新たな視点とは、子ども文化センターを子どもたちの発言の拠点とし、社会の活性化の一翼を担うことが期待される可能性も生まれてくるだろうということだ。

今後数年は、これら子ども文化センターの理念を現地と共有、確認しつつ、新たな子どもたちの「居場所」として、子ども文化センターの新しい姿を形成してゆきたいと考えている。

(野口朝夫 森透)

ボランティア掲示板

次は、あなたも
一緒に！

◆国際協力フェスティバル2002◆

喉は枯れ、職場の同僚はあきれ顔

10月5・6日の土日、日比谷公園で国際協力フェスティバル開催。私は、今年も食ブースを担当。今回はミーカティ(ラオスのソバ)を売ることになり、皆気合が入ります。しかし、なんと割り振られたテントは一番端のはじ！しかも途中の店の多くがコーヒーを売っていて、「カフェラオ(ラオスのコーヒー)も売れなくなってしまう」と心配でした。しかし、そこはASPB。達人たちの作ったミーカティには絶対の自信あり。呼び込みにも気合が入ります。すでに数多くのイベントをこなし、お祭り慣れ？しているボランティア陣が声を張り上げます。ほどなく行列が出来始め、評判を聞きつけて食べにきてくれる人もたくさんいて、抜群の評価。カフェラオも、ASPBのコーヒーマスター塩谷さんの的確なアドバイスにより売り上げを伸ばし、ついには練乳をたっぷり入れて飲む「ラオススペシャル」が大評判。コーヒーの抽出が追いつかず、混乱するほどでした。

忙しい合間を縫ってスタッフも交代で食事。ラオス料理は何度食べても、その美味しさに顔がほころんでしまいます。これがあるからボランティアはやめられない、と思うのは私だけではないはず！ラオスコーヒーの独特の風味も病みつきになります。

教育ブースにも出展。ラオス人留学生による伝統舞踊の披露も。そんなこんなで、慌ただしい2日間。声を出し続けた私は、翌日喉を枯らして出勤し、同僚のあきれた眼差しに晒されるのでした。

このような私たちの活動によって、ラオスの子どもたちの未来が少しでも明るく輝かしいものになることを願っています。(櫻庭隆之)

◆OTAふれあいフェスタ◆

寒い！アクシデント！天は見捨てず

11月9日(土)。今にも降りそうだ。めちゃくちゃ寒い。会場は天井があるので雨の心配はないが太陽の恵みは望めず、吹きぬけなので風が寒さを倍加させる。OTAふれあいフェスタでの過去の成績は、はかばかしくない。今年はフリーマーケット式で臨む。果たしてどうか。

コーヒーが売れ始める。寒さが幸いした。私も相撲部屋のちゃんこ汁を買ってきてしまった。昼、客足が止まる。食事や他のフリマに流れたり。ここは近くに羽田を控えているので、航空会社が機内の食器を安く出している。

夕方になって寒さが戻る。

「コーヒー14個」と、お姉さん。貯めていたコーヒーが私底。さらに「コーヒー16個ネ」。「手打ちうどん」の店を開いているトラック組合のお姉さんだった。吹きさらしで働くお兄さん達にコーヒーを配る様子。フル活動だ。

アクシデント！！大きいコーヒーサーバーが突然壊れた。急きょ湯沸しポットとコンロで入れまくる。間に合いました。どうにか…。

2日目、久留さんが大きなリュックを背負ってやってくる。全部フリマの商品。思わず「どこから帰ってきたの？」と聞いてしまいました。大変だったろうな。

売れました。ほとんどが。ラオスの子どもが作った木彫りの置物も。お買い上げ、ありがとうございました。

うござい
ました。

(清水宏子)



今後に向けて、いくつかの課題。

Q 大人の都合

子どもが、子どもとして。

大人の手伝い役としての子どもでなく、子どもが子どもとして輝く場。そのことの価値を大人が見出していく場。それが子ども文化センターの存在する理由です。

本で読んだ昔話を子どもたちが芝居にしたり、若者ボランティア・チームが近隣の村に行って、子ども文化センター活動の出前をしたり。子どもが主人公となる中で成長していける場となっています。

ところが大人は、つい自分たちの都合で、国のためとか、資金調達のためとか、子どもを利用する誘惑にかられてしまいがちです。

そこで、活動の評価会議や職員研修など、機会あるごとに、子ども文化センターのあり方を繰り返し話し合っており、今後とも続けることが必要です。

Q 子どもの実態

活動を通して子どもを知る。

ラオスの子どもを取り巻く現実の問題、例えば薬物乱用やタイへの児童労働などに対して子ども文化センターはどれだけ力になれるのか。活動は、「居場所」となることが防止策の一つと考えています。しかし、実態把握ができていないのが現実です。そこを強化していくことが必要です。

ラオスは、近隣の諸国に比べて、町の中で、子どもの悲惨な状態を目の当たりにするということはありませんが、同時に、子どもを守るための社会的な制度も整っていません。

子どもが直面する問題に、子ども自身がどう向き合うか。例えば、紙芝居のワークショップ

で、参加者のこんな取り組みがあります。

ナシの実を採ることが子どもたちの仕事。高い木から落ちて大怪我をしたり死亡する子までいる。どうしたらよいか、解決策を話し合い、紙芝居にしたというのです(その内容が気になりますが未確認です)。

子ども文化センターの活動の今後の方向を示唆した取り組みといえます。

Q 子どもの参加

子どもが作る子ども文化センター。

今日、子どもに関わる活動をする者に求められるのは「子ども参加・参画」を促す姿勢です。子ども文化センターにおいて、企画と運営への子ども参加・参画を、どこまで実行できるかが課題です。例えばプログラムの評価やアイデアを子どもに呼びかけたり、子ども文化センターという名前の愛称を募集するのも一案でしょう。

子どもと向き合う姿勢については、ASPBはまだ未熟であると自覚しています。ラオスで、そして様々な場での相互学習の必要を感じています。

Q 支援のしかた

自立に向けたプログラム。

ASPBは子ども文化センターに対する支援として、資金や、子どもに関わる日本の専門家が講師となったり、スタッフに対してワークショップを行ってきました。今後は、センターが直接、国際機関やラオス国内で活動する企業などに資金調達をする能力と運営能力をつけるための支援プログラムを考え出し、提供することが課題です。

(森 透)

プロジェクト の動き 2002.09～12

ラオスで

(学校図書室開設)



2002年9月

12日 ヱィエンチャン市サンサイ小学校 [HakArn75]

13日 ヱィエンチャン市ナーサー小学校 [HakArn76]

18日 ウドムサイ県少数民族中学高等学校
[HakArn81]

支援: キヤノン(株)、(財)ベルマーク教育助成財団

(教員養成校 読書推進セミナー)



ラオス全国の教員養成学校(TTC)にて、先生の卵たちに、図書室運営と読書指導の講習として、読書推進セミナーを開催しました。会のラオス人スタッフも講師となり、「本は子どもの成長にいかにか大

切か」を学び、講習の最後は、学生たちが、学んだことを寸劇で披露してくれるなど、たいへん好評でした。赴任先での活躍を期待します。

2002年11月

4日～7日 バンクンTTC (ヴィエンチャン県)

ドンカムサンTTC (ヴィエンチャン市)

25日～28日 サワンナケートTTC

カーンカイTTC (シェンクワン県)

12月

9日～12日 パクセーTTC (チャムパサック県)

サラワンTTC

23日～26日 ルアンパバンTTC、ルアンナムターTTC

支援: (財)国際開発救援財団

日本で

(企業6社合同 ボランティア体験講座)



2002年10月17日(木)、住友商事(株)大阪支社にて開催されました。1月に東京で、6月に名古屋で開催された社員向けイベントの第3弾です。野口よりラオスの現状とASPBの活動についての説明を聞いた後、絵本にラオス語の翻訳を貼り付ける作業を体験。この日60冊の「ラオス語絵本」ができあがりました。3か所合計180冊の絵本がラオスの小学校の図書室に届けられました。

主催: キリンビール(株)、住友商事(株)、大和証券グループ、東京三菱銀行、三井住友銀行、三菱商事(株)

JICAとの開発パートナー事業が動き出しました。

JICA（国際協力事業団）と ASPB とのパートナーシップによる、開発パートナー事業「ラオスにおける読書推進運動支援プロジェクト」が2002年12月よりスタートしました。

この事業は、ASPBがこれまで手がけてきたプロジェクトを、日本の政府開発援助（ODA）の資金を使って、3年間にわたって、さらに広範に行うというものです。

プロジェクトの内容は次のとおりです。

本を6タイトル、合計30,000冊出版します。

学校への本の配布は、初めて図書箱・図書袋を届ける学校と、一度届けられた後、一定期間を経て本を補充する学校とがあります。今回は3年間で延べ2,000校に配付します。配付先では、学校の先生に配付セミナーを実施します。

■日本人スタッフがラオスに常駐

今回のパートナー事業で、読書推進運動は、大幅な増強となります。例えば2001年度の実績は図書袋40校、図書補充130校で合計170校でした。パートナー事業では、年間にしてその4倍近い学校数になります。JICAとはプロジェクトの企画・評価を共同で行います。

このプロジェクトを現地で管理、調整するため、近藤知子が12月末よりラオスに赴任しました。今後は、定期的に現地のプロジェクト進捗状況や現場の声をお届けしていく予定です。

今日、NGOとODAとの連携が時代の流れになっています。とはいえ、まだ始まったばかりで、両方で模索をしている段階にあるといえます。今回もプロジェクトの骨子について、まとめ上げるのに多くの時間を要しました。私たちは、ODAのやり方から学べるところは吸収し、また、ODAに対しては、NGOの流儀をアピールしていきます。パートナーとは、そこから新しい価値が生まれてこそ、意味があるからです。

特定非営利活動法人の設立に向けて、総会を開きました。

NPO法人（特定非営利活動法人）となるための準備を進めてきた ASPB は、2002年12月7日（土）、「特定非営利活動法人 ラオスのこども」の設立総会を開催。33名（含ラオス事務所スタッフ2名）が参加し、設立を決定。東京都に申請し、春ごろ認証となる見通しです。

NPO法人とは、市民の国際協力団体（NGO）や市民の公益団体（NPO）などを指します。今日、法人格は社会の信用を得る上での目安とされつつあり、取得に取り組みしました。

■会の名前は「ラオスのこども」に

これを機に、意思決定のプロセスなどが誰にでもわかるようにするなど、組織として形を整え、透明性と参加しやすさを高めようと、事務局とボランティアで話し合いを重ねました。形を整えるとは仕切りを作ること、参加しやすくするとは敷居を低くすること。相反するようですが、この取り組みそのものが参加を高め、それによって会はパワーアップしたといえます。

団体の名称は、これまでの懸案事項でした。「絵本を送る」は活動の一つであって、会の趣旨の柱ではないからです。親しまれた「絵本」という名前ですが、「こども」を見つめ、「こども」から活動を発想し、展開すべきという思いを込めて「ラオスのこども」としました。

今後ともご支援をよろしくお願いします。



スタッフが来日、 活動報告を行いました。

2002年12月7日～13日、現地事務所所長ソンペットと事業担当ボーケオの2名が来日。短い日程ながら勢力的に動き回りました。

成田空港に朝到着すると、そのまま大田区の活動報告会の会場に直行し、現地活動やヴィエンチャンの今について報告を開始しました。午後は法人設立総会に出席。今回の来日は、これが第一の目的でした。かつて、東京が本部でラオスは実施機関という組織のあり方でしたが、それはおかしいと気づき、重要な会議には両者が参加すべき、と改めたのです。

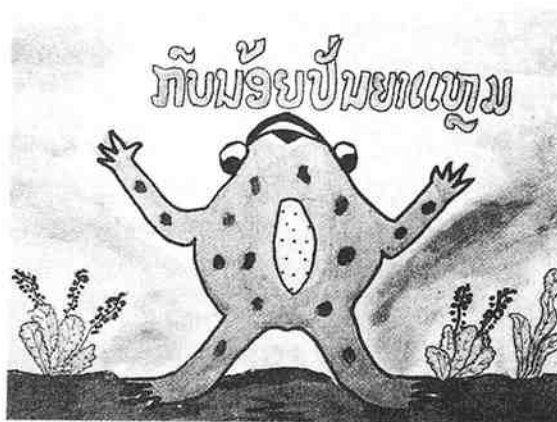
この日、夕方からは交流会。ラオスからの直送品も振る舞われ、賑やかな場となりました。

9日、雪に感激！支援いただいている企業で活動報告。10日、東村山市の蛤谷(はまや)さん宅で1泊ホームステイ。11日、多摩川上流処理場へ。水の浄化や顕微鏡でバクテリアを見たり、昭島市の昭和保育園で劇の練習をする子どもたちと交流。12日、事務所近くの大田区立梅田小学校と幼稚園へ。お誕生日会に飛び入りでラオス語の童謡を披露したり、焼き芋大会も。2年生に「ラオスのどこからきたのですか？」と質問が飛び出し、ビックリ。「ラオスの子は恥ずかしがって、手を上げて自分から質問しないね」。訪問先の皆様、案内して下さった皆さま、本当にありがとうございました。



紙芝居コンクールで ラオスの作品が受賞！

神奈川で行われた紙芝居文化推進協議会「手づくり紙芝居コンクール」に、ラオスからの作品を応募しました。



今回は、事前に広く呼びかけたこともあり、各子ども文化センターを中心に中学生などから多く作品が集まり、合計22点の作品をラオスから応募することができました。うちトンミーバンドアンシー絵・原作の「しあわせなカエル」が優秀賞を受賞。加えて教育画劇賞という特別賞も受賞しました。2001年の同コンクール、2002年7月の箕面市でのコンクールに引き続き、3度目の快挙となりました。

おはなしは、「空を飛べたらどんなに幸せだろう」と思っていた青カエルが、冒険するうちに水の中で気持ち良く泳いでいる自分に、幸せを感じるというストーリー。

審査員からは「伸びやかなカエルがいいですね。カエルと一緒に「サバーイ(気持ちいい)」と叫びたいですね」と講評をいただきました。

2002年11月24日に行われた本審査会では、「しあわせなカエル」の脚色と監修をしてくださった蛤谷糸美さんが実演。優しい語り口が伸びやかなカエルの絵と合わさり、会場にラオスの爽やかな空気が流れていました。

小さな首都の見どころ

大学でラオス語を専攻して2年になる。2002年9月、ようやくラオス旅行が実現した。バンコクから約10時間寝台列車に揺られ、タイとラオスを結ぶ友好橋を渡り、初めて自分の足でラオスの地を踏んだときは、やっとたどり着いたという気分だった。

静かな町。これが、ヴィエンチャンの第一印象である。人がいないわけではないが、日本にあるような喧騒はない。踏み切りが無いからか、混雑する場所が無いからか。ラオス人は、暑い日中は近くに行くにもトゥクトゥクに乗ってしまうので、歩行者は少数派の外国人だ。首都とはいえ栄えている範囲はごく狭い。中心地でさえ、広さは日本でいう「町」くらいだ。街中を歩いていて、偶然同じ学科の友人や帰省中の留学生に出会って驚いたが、広いヴィエンチャンの中でも行く場所が限られていることを考えると、全然不思議なことではなかった。

2日あれば回り切れてしまうヴィエンチャンに10日いても飽きなかったのは、ラオス人の人柄が見どころだったからである。例えばタラートサオのシン(ラオスの巻きスカート)屋は、店番をしながら堂々と食事や昼寝をしている。なんてのんびりしているのだろう。こんなことが通ってしまうのかと、感心してしまったくらいだ。そして一番感心したのは、ラオス人の温かい心である。彼らは見ず知らずの人でも、一度会えば親しくなれるのだ。

トンカンカム市場のおばさんは、今日会ったばかりの外国人の私を、娘だと言ってかわいがってくれた。庭先のテーブルで飲んでいた若者のグループは、いわゆるナンパではなく、ただ一緒に楽しもうと私を飛び込みでその席に招いて、友達になってくれた。これらは日本では考えられず、ある意味うらやましいことだ。こんな

国もあるのだなあと思っは、ラオスがますます好きになった。このようにラオス人と触れ合うのは、ラオス語の勉強になったのは勿論だが、それよりももっと貴重なものを得る体験だった。実際に現地に行ったことは、これからのボランティア活動にも生きてくるだろう。

ラオスの「お母さん」と、来年また会いにくることを約束して、再び友好橋を渡った。

(寺内由華)

Tokyo & Vientiane 事務所の動き

[東京事務所]

2002年9月

- 7日 キヤノン、チャリティ・ブック・フェア。図書整理に参加(近藤・赤井)
- 14日 コープかながわアジアの旅事前学習会(チャンタソン)
- 19日 ミクプランニングにて活動報告会(チャンタソン・森)
- 26日 馬込東中学校フォーラム(チャンタソン)

10月

- 5日～6日 国際協力フェスティバル
- 17日 企業6社合同翻訳貼付ボランティア体験講座～大阪(野口)
- 22日 (財)日本国際協力システム意見交換会(近藤)
- 23日 多摩きた生活クラブ生協交流会(森)
- 28日 大田区ボランティア貯金推進協力会総会(野口・近藤)

11月

- 9日～10日 OTAふれあいフェスタ
- 16日 生活クラブ生協草の根市民活動助成交流集会(森)
- 24日 手づくり紙芝居コンクール本審査会・表彰式(赤井)

12月

- 7日～13日 ラオス人スタッフ2名来日
- 7日 ラオス人スタッフ活動報告会
NPO法人 ラオスのこども 設立総会

[ラオス事務所]

プロジェクトのページをご覧ください。

次は、あなたも
一緒に！

ボランティア掲示板

◆国際協力フェスティバル2002◆

喉は枯れ、職場の同僚はあきれ顔

10月5・6日の土日、日比谷公園で国際協力フェスティバル開催。私は、今年も食ブースを担当。今回はミーカティ(ラオスのソバ)を売ることになり、皆気合が入ります。しかし、なんと割り振られたテントは一番端のはじ！しかも途中の店の多くがコーヒーを売っていて、「カフェラオ(ラオスのコーヒー)も売れなくなってしまう」と心配でした。しかし、そこはASPB。達人たちの作ったミーカティには絶対の自信あり。呼び込みにも気合が入ります。すでに数多くのイベントをこなし、お祭り慣れ？しているボランティア陣が声を張り上げます。ほどなく行列が出来始め、評判を聞きつけて食べにきてくれる人もたくさんいて、抜群の評価。カフェラオも、ASPBのコーヒーマスター塩谷さんの的確なアドバイスにより売り上げを伸ばし、ついには練乳をたっぷり入れて飲む「ラオススペシャル」が大評判。コーヒーの抽出が追いつかず、混乱するほどでした。

忙しい合間を縫ってスタッフも交代で食事。ラオス料理は何度食べても、その美味しさに顔がほころんでしまいます。これがあるからボランティアはやめられない、と思うのは私だけではないはず！ラオスコーヒーの独特の風味も病みつきになります。

教育ブースにも出展。ラオス人留学生による伝統舞踊の披露も。そんなこんなで、慌ただしい2日間。声を出し続けた私は、翌日喉を枯らして出勤し、同僚のあきれた眼差しに晒されるのでした。

このような私たちの活動によって、ラオスの子どもたちの未来が少しでも明るく輝かしいものになることを願っています。(櫻庭隆之)

◆OTAふれあいフェスタ◆

寒い！アクシデント！天は見捨てず

11月9日(土)。今にも降りそうだ。めちゃくちゃ寒い。会場は天井があるので雨の心配はないが太陽の恵みは望めず、吹きぬけなので風が寒さを倍加させる。OTAふれあいフェスタでの過去の成績は、はかばかしくない。今年はフリーマーケット式で臨む。果たしてどうか。

コーヒーが売れ始める。寒さが幸いした。私も相撲部屋のちゃんこ汁を買ってきてしまった。昼、客足が止まる。食事や他のフリマに流れたり。ここは近くに羽田を控えているので、航空会社が機内の食器を安く出している。

夕方になって寒さが戻る。

「コーヒー14個」と、お姉さん。貯めていたコーヒーが払底。さらに「コーヒー16個ネ」。「手打ちうどん」の店を開いているトラック組合のお姉さんだった。吹きさらしで働くお兄さん達にコーヒーを配る様子。フル活動だ。

アクシデント!! 大きいコーヒーサーバーが突然壊れた。急きょ湯沸しポットとコンロで入れまくる。間に合いました。どうにか…。

2日目、久留さんが大きなリュックを背負ってやってくる。全部フリマの商品。思わず「どこから帰ってきたの？」と聞いてしまいました。大変だったろうな。

売れました。ほとんどが。ラオスの子どもが作った木彫りの置物も。お買い上げ、ありがとうございました。

(清水宏子)

